Iは哀より出でて哀より愛し

SAKI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉは哀より出でて哀より愛し

【Ｎコード】
Ｎ９３７９Ｔ

【作者名】
ＳＡＫＩ

【あらすじ】
［建て前］
一人の少女がネギまの世界で頑張る話です

［本音］
一人の少女が（望んでもないのに自称神に『細胞操る能力』を与えられそしてトリップさせられた）ネギまの世界で（様々な物に傷つ

けられ鬱くしくそして激しくぶっ壊れながら）頑張る話です

結構オリジナル設定があります

なお気分が悪くなったら閲覧を中止してください

この作品は作者の気まぐれですので消える可能性もあります

注意

この作品は作者がトリップ物を見ながら「順応度高ーな。それに精神面強いなー」と思いながら作った自己満足作品です

そのため主人公ちゃんが理不尽に飲まれて精神を病み次第に壊れていきます（というかそれが主体の話です）

おそらくカニバリズムなどの若干血なまぐさい表現（作者の表現力はありませんが）が出てくることになると思います

食欲がなくなったり気分が悪くなったりしても私は責任を負いません

あと救いは多分無いです

それでも良ければご覧ください

飛ばされて燃やされて（前書き）

ついつい始めてしまったネギま！？トリップ

正直転生者って状況把握能力が異常だと思う

９／２４、改訂

飛ばされて燃やされて

『人にやられて嫌な事はするな』

これは子供を教育する時、相手を思いやる心を覚えさせるうえでよく聞く言葉である

では『自分がやられて嬉しい事を他人にしろ』はどうだろうか

ところがこれはあまり聞かない……というか聞いた事もない

なぜならそれは善意の押し付けでありお節介だからだ

私は目の前にだだっ広く広がっている青空を見上げながら自称神から渡された紙を握りつぶした

部活中に前触れも無くいきなり気を失った私は気がつくとだだっ広い草原の上に寝転んでいた

生憎だが私は登山部でも無いのでこんな所に寝転がっているなんて予想外以外の何物でもない

普通に病院か保健室のベッドの上で眠気眼をこすりながら起き上がり〝起きたの？〟とか言われてるはずだろうに

そんな予想とは裏腹に何も邪魔する事なく広がる青い空に都会では決して味わう事の出来ないような空気が美味しいという感覚に感動ではなく絶望すら覚えた

そんな私、ただの日本の一県立高校生の制服のポケットの中に不可解に入っていた紙……

そこに書いてあった内容は要約すると3つの事だった

1、どうやら私は死んだらしい

2、そしてここはネギま！？の世界らしい

3、私は細胞を操る能力があるらしい

そのほかは謝罪やらが長々と書いてあった為割愛する

それを見てのさっきのリアクションだった

まあなんと言うか少し誠意を感じない内容だ。謝罪もなにやら少し薄っぺらかったし……

とりあえず1は仕方ない。形ある物はいずれなくなるんだし齢17で死んでしまうのならそれが私の天命だったのだろう。特に恨む事でも悔やむ事でもない

そして過ぎてしまった出来事に何を言っても仕方ないが、ただでき

るなら2と3をする前に私の意志を介入させて欲しかった
なぜなら介入させてくれたら私は今この地に立つ事は無くあっさりと仏様になる予定だったからだ

お節介を妬いてくれた自称神に申し訳はないが何もかも知らない虚構の世界で過ごすくらいなら私という存在が平凡な一学生として過ごした時間が薄れてしまう前に普通に消えてしまいたかった

今私の立たされている立場は一部の人ならすごい喜ぶシチュエーションなんだろうが生憎私は生前漫画など手にしない堅物だったからかネギま!?とかは何なのか全くわからない。紙にあった並行世界とかのワードもわからなかった

だからだろうか……いや、多分まだあまりこの事実を受け入れられていないからかもしれないが、いかに自分が今大変な状況に置かれているかわからなかった

それが平和ボケした東の島国の一学生には考えられないようなレベルだろうなんて……

「ーーーーーー!!」

しばらくするとこの見通しの良い平原に私の姿を見つけたであろう

男性が何かを叫んだ

言葉はわからなかったがそれはおそらく人を呼び出しているようだ

とりあえずここがどこだかわからない私は万国共通のコミュニケーションツール、所謂ボディラングイッジで対応しようとするが男性はそれに応じる事なく何かをふりかぶって投げた。

それは彼の手から離れると綺麗な放物線を描いて私の方に飛んできて飛んできたのは石だった。手のひら大のとても投げやすそうな

「痛っ！！　」

襲いかかってきた衝撃に体がのけぞる。ドロリと額からは血がながれた。どうやら切ってしまったのだろう

フラフラする意識を保ちながら男性をよく見ると男性の服装はまるでおとぎ話に出てくる木こりのような前近代西洋的な格好だった

考えても見て欲しい。彼は格好からするにおそらく前近代文明の人間だ。

それに対する私の格好は現代日本の千葉県にあるとある県立高校の夏服……つまりワイシャツとベストとスカート

私は彼にとっては異端な存在なのは火を見るより明らかだった

人間は元来集団から浮いている物を排除する性質を持っている。出る杭は打たれる……何か違うがだいたいそうだ

私は男性の前から逃げ出そうと足に力を入れた

立とうとして右足に体重を乗せるが私の右足の膝は数秒も持たずガクリと折れ曲がってしまった

恐怖に押しつぶされた私の足は完全に笑っていて私は無様にぺたんとへたり込んだ

当たり前だ。ついさっきまでただの学生だったんだから

こんな非日常的恐怖に耐えられる訳がない

「……っぁ」

痴漢された子が声を出せない時代に生まれた私には間近に迫った生命の危機に声すら出せなかった

防犯ブザーの必要性がすごく理解できた

「ーーーーー」

男性が何事かを言うと鈍い衝撃が私を襲った

蹴られた

蹴られてまるで芋虫のように転がった私に男性は追い討ちをかけるように蹴り飛ばす

しばらく暴行を受けていると続々と人が集まって来た。

男性も女性も老人も子供もみんな殺気だって私に詰め寄った

集団暴行だった。顔の形が変わるくらい殴られた。あばらが粉々に折れるほど蹴られた。だけど額のキズは消えていた

そして男達は私がグッタリしているのを確認して私の手足を拘束して制服に手をかけた

そして下品な笑みを浮かべ下半身に手を……

数秒後、私は純潔を失った

いつの間にか私は平原から運ばれたらしい

目の前には中世ヨーロッパみたいな街並みが広がっていた。こんな状況じゃなければその美しさに素直に心打たれただろう

……今、私は破られた制服を身に纏い十字架に厳重に貼り付けられていた

そんな私の隣には同じ状況の綺麗な金髪のお人形ような女の子がいた。これから起こることが怖いのか女の子はうつむいたままうなだれていた

こんな幼い娘まで……可哀想に思った私は彼女を安心させようとにこりと微笑んだ

「大丈夫だよ」

言葉が伝わらないのはわかっている。だけどもしかしたら心は伝わるかもしれない

そう思っていると女の子は私の声が聞こえたのかびくっとしたあと申し訳なさそうな顔で私を見た

どうしてだろう？別に彼女のせいでは全くないのに……

眼下では神父さんが木箱の上に乗りなにやら演説していた。松明を持った人々が私達の方へ歩いてくる。群集は血気盛んに何かを私達に叫ぶ

なんとなく事情がわかってきた。ここはおそらく中世ヨーロッパ。私達は異端の徒

ああ、これは魔女狩りなんだ……と

自分達と違う人間を異端として排除する。教会の権威を上げる為のあのイベント

人々の恐怖につけ込むあたり悪徳商法なんかと変わりないんじゃないだろうか。まあコレは人々に必要とはされているのだろうけど……

女の子がジタバタして必死に脱出しようともがいていた

私はそんな気力すらなかった。というより生きるのに必死な女の子には悪いがこんな悪夢、とっとと終わって欲しかった

十字架に火が放たれる。熱気がだんだんと私達に襲いかかってくる。
隣では女の子が群集をキッと睨みつけていた
ただその勢いも続かなかったのか少しずつ寂しそうな顔になっていく。
それに合わせ、だんだんと私の体が焦げ始め肉を焼く異臭が鼻に入ってくる
あまりの熱さに声を上げたかったけど女の子が上げてない手前年上の私が上げるのは恥ずかしかった
女の子はそんな私を怯えるように見ていた。女の子の体は私に比べると傷が少なかった
私の体は焼けた制服がまとわりついて皮膚も少し溶けて来ている

「……ぁつ、ぁぁあ゛」

急に激痛が走り左足にドロリと高温の何かがまとわりつく
どうやらポケットの中の定期入れ（プラスチック）が溶けたのがスカートに開いた穴から垂れたのだろう
溶けたプラスチックが左足を蹂躙し始める。多分皮膚ごと引き剥がしながら下へと垂れているのだろう

熱さを通り越して尋常じゃなく痛い

声を出すまいと唇を噛み締める。あまりの噛み締めの強さに唇を貫いた上の歯と下の歯の隙間から血の味が口の中にじんわり広がった

しばらくして炎で体を拘束している縄が切れる頃には私の意識はすでになかった

私は今、十字架に張り付けられていた

何故こんな事になっているかというと私が吸血鬼だからだ

町の人々は口々に私に暴言を浴びせる。中には石を投げつけてくる人までいる

その鬼気迫る人達の顔が怖かった

ふと隣を向くと私よりいくつか年上の変な服を着たお姉ちゃんが同じように張り付けにされていた

お姉ちゃんが貼り付けられているのはもしかしたら私をかばってくれたりしたからなの？

だったら私のせいで

「ーーーーー」

声が聞こえた。何を言っているかわからなかったけど綺麗な鈴のような声だった

お姉ちゃんの方を見る。お姉ちゃんは私を優しい笑顔で見ていた

「神の名のもとにこれからこの地を汚す魔女達を成敗する！！」

神父さんがそんなことを言うと松明を持った人々が十字架に近づいてきた

なんで？神父さんのお仕事は困っている人々を助ける事だよね。私は化物だからまだわかるよ。でも……

「お姉ちゃんは関係ないの！！　助けてあげてよ！！　悪いのは私なんでしょ！！」

私は手足をジタバタさせて訴える。お姉ちゃんは死を覚悟したような顔をしてた。やめて、そんな顔しないで……生きようよ、ねぇ

「火を放て」

私の訴えもむなしく私とお姉ちゃんの十字架に火がつけられる
私は町の人を睨みつける。なんで、なんで、なんで、なんで
熱さと恐怖と怒りがこみ上げてくる
声を出すのが悔しかったから必死にこらえた
片っ端から焦げた痕が治っていく自分の体につくづく自分が人間じゃないんだと感じた
ああ……お姉ちゃんにも化物だって見られてるのかな？
お姉ちゃんの方を見るとつらそうな顔をして体のあちこちを焦がしていた
だんだんとお姉ちゃんの顔が険しい物になっていく。口から血が流れていた
お姉ちゃんが私の方を見る。拒絶される、怖い、怖い
でもお姉ちゃんは眉間に皺を寄せてはいるけど私の視線に気がつくとぎこちなさそうに笑った
そしてしばらくするとお姉ちゃんの体が地面へと落ちた
「お姉ちゃんっ！！」

いつの間にか夕暮れ時になっていたのかもう周りには誰もいなかった
私はお姉ちゃんの遺体を抱えて一人で町外れの岬に向かった。お姉ちゃんの体は驚くほど軽かった……

海の見渡せる崖の上にお姉ちゃんのお墓を作るために穴を掘った
お姉ちゃんは体中が焼け焦げていて、特に左足は赤く焼け爛れ、硬く透明な何かがへばりついていた
そんな体を見てるのが辛くもう二度と見ることは無いだろうその顔を心に刻み込んで、形見として右の薬指にはまっていた指輪を外し自分の指にはめた

それは後世で闇の福音と言われ恐れられる吸血鬼しか知らない出来事だった

だがこの話には少し御幣がある。ただそれは仕方がなかった事である

数日後女の子が掘ったそのお墓の中からゆらりと立ち上がる影がいた

快楽に溺れて（前書き）

五流作者なのでいたらない点もあると思いますがよろしくお願いします

９／２６、改訂

快楽に溺れて

生物は『死』を恐れる。それは人間も等しく同じである

でもその概念が無いと恐らく文明は進化してはいなかっただろう

『死』が怖いから神を信じた。『死』が怖いから何かを残した。『死』が怖いから富を欲した

『死』は畏怖の象徴でかり、ある意味人間の目標であり、そして終着点なのだろう

それを失ったら……それは人間と呼べるのだろうか？

どうやら私は意識を取り戻したらしい。推量形なのは何故か瞼が開かないからだ

とりあえず手を動かそうと力を入れる。横には動く気配が無いので縦に

すると左手だけが上に乗っかってた物をどかして自由な空間に出す

事ができた
以後何十分か私は上に存在する物をどかす事に打ち込んでいた

「……ふぅ、疲れた」

そしてようやく体が起こせるくらい上に乗っかっていた物＝土をどける事に成功した。まさか土に埋められるなんて思わなかった

「それにしてもこの青く広がる空がここまでうざったく感じる日が有るなんて」

そう呟いたのは仕方ないだろう。なんせ人生初の生き埋めにされるという経験をした上に空はまるでそれがどうしたと言わんばかりに澄んでいるんだから

そもそも土に埋められた時点で生きているなんて事はまずはないしそこまでされてもまだ生きているこのつくづく非常識な私の体にうんざりした。

原因はわかってはいる。おそらく自称神につけられた『細胞を操る能力』だろう

操るという割には私の意思に関係なくこの体は再生していたのだけれど

そう、勝手に再生していたのだ。つまり……

「私は……死ねない」

口に出した事実が私に重くのしかかった

死ねない……それは異端として私は人間になぶられ続ける事を意味していた

そして理解をされない永久の孤独を約束された事も意味していた

空はそんな私の心情と違い晴れ渡っていた。やっぱりうざったい

ずいぶんと綺麗に再生していた足を土の中から取り出すと左足に固くなった何かが張り付いていた。それは低温で溶けてから固まったプラスチックだ

私はそれを力任せにひっぺがす。プラスチックとともに結構な範囲の足の表皮がはがれてしまった

痛かったので治れと念じてみる。念じると私の足は秒かからずで元

通りの綺麗な物になった

なんかイライラしたから墓標である十字架をへし折った。というかしばらく十字架なんか見たくない

それから十字架相手にそれなりの時間暴れまわった後、私はある重要な事に気づいた

自分の体に目を向けるとそこには大胆に肩を露出してナマ足を晒してへそ出しルックで豊かとは言い難い双丘が誇らしげに存在していて惜しげもなく局部を公開していた

つまり産まれたままの姿だった

たとえこんな状態だろうと私にも女としての恥じらいがあるので裸で目立つ所にいる事は避けたかった

その為私はとりあえず開けている岬から遮影物の多い森に移動した

視線も何も無いが裸で外にいる事はやっぱり落ち着かない。不意に物音がすると心臓が飛び出しそうになる

いかに衣類が現代人の精神衛生上重要なのかまざまざと理解できた

ガサガサッ

ビクッ

そんな事を考えているとなにやら後方で大型の何かが動く音がした

体が固まり脳は警報を鳴らしまくる。体からはイヤな汗が噴き出してくる。羞恥心その他もろもろが一瞬で吹き飛んだ

私は恐る恐る振り向いた。それは錆び付いたネジのように緩慢な動きだった

私の視界にそれが映るのが早かったかそれが私に吠えたのが早かったのかわからない

「ーーーーーーー!!」

視覚で、聴覚で、感覚で、私は理解した。震えが止まらない。鳥肌が全身に立つ。呼吸が早くなる。心臓が早鐘を打つ。

そう、それは私があの草原で最初に出会った、木こり風の男だった

恐らく仕事でこの森に来ていたのだろう。男はその手に大きな斧を携えていた

最初は男も私の存在に驚いていたが私が怯えているとわかるとすぐに表情を下品な物に変えた

男は斧を近くの木に叩きつけて私を脅す

私は一歩一歩と追い込まれる様に後ずさろうとするが足を滑らして尻餅をつく

男はいっそうその不愉快な表情を深い物にして私に近づいてくる

男の手が私の手を掴もうと伸びてくる

剥き出しの雄という存在に心底恐怖したあの嫌な思いがフラッシュバックする

目をつぶった私は最後のあがきとして無我夢中で手を振り回した

その間何が起きているかなんて全くわからなかった

掴まれる筈の腕は掴まれることなく私の顔には熱い液体がびしゃりと勢いよくかかった

不思議に思い恐る恐る目を開けるとそこには

片腕のない男が地面の上を喚き散らしながら大量の血を流し無様にのたうちまわっていた

その姿はまるで殺虫剤を浴びて苦しむゴキブリに酷似していた

男の腕を探すとそれは先ほど男が斧を突き刺した近くに転がっていた

視線を自分の右手に移すと真紅の液体が指の隙間から滴り落ちていた

蒸せかえるような臭いと目に悪い色彩が逆に気分を高揚させる

血の付いた右手で唇をなぞる。まるではじめてお化粧した時みたいなドキドキ感があった

唇の端に行くにしたがって指の動きがだんだん平行から傾いた動きになってくる

私、笑ってる？

なんでだろう……さっきまで目の前の男があんなに怖かったのに……もう何も怖くない

唇に液体を塗り終わった手を広げて顔をおさえる。顔の半分近くがベットリと赤黒く染まる

「あは……」

・・

人間が笑う理由なんか一つしかない

……楽しい

のたうちまわっていた男を足で転がししゃがみこんで顎に手を添える。男は蛇に睨まれたカエルのように動きを止め怯えた顔で私を見る

「ねえ、私綺麗でしょ。今私は機嫌がいいんだ。だからさ……私の事、綺麗って褒めてくれたら助けてあげる」

私はわざとらしく笑みを浮かべて男を見る。男はそんな私を見て再び喚き散らす

言葉は伝わらないものの男は血の気のひいた顔で私に何か伝えようと口を動かしていた

私は男に背を向けてある物を取りに行く

男の方をチラリと見るとまるで安心したかのような空気を纏っていた

ある物を回収した私が男の方に戻ると男は再びその顔を絶望に染めた

男をよく見ると下半身辺りに黄色い水たまりが出来ていた

……汚い

私は力任せに男の口をこじ開けて千切れた男の片腕をねじ込む。男は顎が外れたらしく苦痛に顔を歪ませた。私の中の何かが疼く

「うるさいな〜。そんなに言っても私分からないよ。それにあんな汚い物まで見せつけて。でも私は優しいからね、許してあげる。だから一言、綺麗って言って。さぁ早く」

そう言って私はカウントをはじめる

カウントが少なくなるほど男の顔は絶望に染まっていく

圧倒的なまでの暴力

それは規律に縛られた現代、その中でも特に平和な日本の学生には味わえない快楽だった

暴力は悪い事。もちろんそんな事は幼稚園児だって知っている

事実私だって学校では品行方正な優等生だったし、カツアゲのような行為に及ぶ町の不良に嫌悪感を抱いた事もあった

だけど今なら彼らの気持ちはわかる

征服欲

これはとんでもない麻薬だ

怯えた顔で私を見つめ、震えた足で逃げ惑う。相手の生殺与奪を握っているという実感、心の折れる瞬間の表情

この味を知ってしまうともう後戻りなんてできない

規則なんて関係ない。思いやりなんて必要ない。常識なんかクソくらえだ

もっと私に快楽を、もっと私にエクスタシーを

「イチ、ゼロ。はぁい残念賞。たったの一言すら言えないなんてね」

カウントを終えた私は男の斧を手に取る。そして薪を割るように口に入っている男の腕に向かって振り下ろした

男が動かなくなった後、黒い奔流が消えた私は蒸せかえる血の臭いに嘔吐した

堕ちて（前書き）

今回までがプロローグみたいな物です

次回から現代編に入ります

なお今回嘔吐描写があります。食事と関係ない時間にお読みください

まあ作者はこれ書いてんの昼休みなんですけどね

堕ちて

人間はその存在を『顔』で識別している。逆に顔以外だと識別するのは相当困難だ

そのため『顔』は自己のアイデンティティの塊である

だけれどもあなたはそれくらい大事な『顔』を寸分違わず鮮明に思い描くことはできるだろうか？

例えば大事な家族や恋人の『顔』を思い描くことができるだろうか？残念ながら私にはできない

では……自力で見る事のできない自分の『顔』はどうだろうか？

吐き出した物は黄色く透けた胃液だけだった。そういえば何も食べていなかった

気分は全くという程優れないが反対に体はカロリーを求めていた

私の目が男の死体の方に行く。ここは森なのだから食料なんかいくらでもあるだろう。なのに目は男の方に行く

顎が砕けて口が裂け、口だった穴から腕が生えていた。それが肉や骨を無視して中心から裂かれていた。瞳に生気はもちろんなくただの球体となり果てたそれはただ無感情に私の視線の先に存在してた

「うぅ……オエゥ」

そうしてまた気持ち悪くなってかれこれ四度目の嘔吐をする。やっぱり胃液しかでなかった。

さっき自分を支配していたあの圧倒的なまでの快楽は既になりを潜めていた。興奮して火照った体も既に冷めきっていた

今更ながらも冷静になって考えると私は大変な事をしでかしてしまったように感じる

私は笑いながら人を殺したのだ。しかもあんな残虐に

嫌悪感と後悔と罪悪感が襲って来る。吐き気は止まらない。思考はどんどん泥沼にはまっていく

出口の見えない思考を巡らすうちにどんどん気持ちが圧迫されていく。呼吸数は上がり喉がカラカラになってくる。悪循環だ

気分の悪化と同時に何故自分がこんな目にあうのかとやり場のない怒りが湧き上がってくる

そんな停滞した思考に一旦けりをつけ私はカラカラの喉を癒やすのと湯だった頭を冷やす為に水辺へと向かった

水に入り頭を冷やそうと思ってた。水を飲んで喉を潤そうと思っていた

だけど水面を見た瞬間、全てを忘れて私はただただ水面を呆然と見つめていた

「……ダレ？」

思わず声が出た。それは滑稽なほど酷く震えた声だった

今ここにいるのは私だけである。他の存在が水面に映るはずがない。いたとしても水面を覗き込んでいるのは私である。だから私は水面に映っている筈である

「あ、あぁ……」

だけどそこに映っているのは黒髪だがおよそ日本人放れした蒼い瞳の女の子

顔の造形も何かが違った。だけどどこがどう違うかまではわからない

「あ……あぁ、あぁ」

こんなの違う。こんなの私じゃない

精一杯自分の顔を思い出そうとする。だけど頭に浮かぶそれは何かが違う

私の苦悩と同調するように水面に映った顔はぐにゃりと歪みつり目になったりたれ目になったり八重歯が生えたり出っ歯になったりを繰り返した

私の目の端から涙が流れていた。意外にもそれは私がこの世界に来て初めて流した涙だった

あんなに辛い事が続いたのに、それがすごくちっぽけな物のように感じる

自分の顔すら思い出せず、自分を証明する物は全て燃えてしまったつけていたお母さんの形見の指輪はいつの間にかなくなっていた

いろんなことを思い出そうとする……高校の友人も中学時代の憧れの先輩もいつも付き合ってくれた幼なじみも男手一つで私を育ててくれた最愛のお父さんも幼い頃に事故で死んじゃった写真の中のお母さんも

みんなの顔だけがもやがかかったように白く記憶から抜け落ちていた
水面に映った私の顔はだれだかわからない顔をしていた
それを見るのが嫌だった私は顔を力いっぱい抑えつけた
あまりの力に目が潰れたがそれを一瞬で治す
もう……何も考えたくない。どうせ元には戻れない
なら胸にたゆっているこの黒い奔流に身を任せても良いんじゃない
だろうか？
そう思った瞬間さっきの男の姿が頭に浮かぶ。私の中の何かが疼いた
高校時代の面影を振り返る……もやの範囲が広がっていた

あぁ……ここにいる私はただの高校生である■■　■じゃない
ただの化物……Iだ

前略お父さん、天国のお母さん

あなた方の娘は親不孝者です。これから世間様に多大な迷惑をお掛けします。二人にもらった名前は汚せませんので音だけお借りします

もう泣かない

化物に涙は必要ない

泣いて良いの人間だけだ

Ｉは快楽を貪る悪役。汚れの象徴たる化物

■■　■は汚れてはいけない聖域

■■　■は死んだ。そしてＩは生まれた

私は化物だ。私は悪役だ

だからもし正義の味方というのがいるなら、Ｉを殺して■を助けて

それは弱い、弱い少女の思いを守るための必死の自己防衛だったのかもしれない

ここまでがある少女、■■　■のエピローグであり

千の顔を持つ悪魔、Ｉのプロローグでもあった事を知るのは誰もいない

時は流れて（前書き）

今回から現代編です。

なんかあからさまな転生者がしゃしゃり出てきます

まあそこらへんの説明はまた後日

時は流れて

『人の本当の死は人に忘れられた時だ』という人がいる
でも人の死は肉体が滅んだ時だと私は思う
だって死んだ人のイメージなんていくらでも変えられるから
『死人に口無し』って言うじゃない
忘れられる以前の問題だと……私は思う

私が麻帆良学園に縛り付けられてからかれこれ１３回目の春を迎えた
学園都市には入学式を翌日に控えた親子が桜並木を楽しそうに歩いている
そんな微笑ましい姿を見て私は憂鬱になる。こんな事ならじじぃの呼び出しなんか無視して家でふて寝をしていれば良かった。花粉症で体もダルいし
「あ、あなた」

いきなり何だと思って振り返る。私を呼び止めた奴の顔には見覚えがあった。そいつは私が最初に中学を卒業した時のクラスメートだった

「……人違いだ」

「そうよね。ごめんなさい」

私は逃げるようにそう言ってそいつの前を離れた

登校地獄

それが私にかけられた呪いの名前だった。ただひたすら中学に通わせられ続ける……そんな馬鹿げた呪いだ

私にそれをかけた奴は三年でその呪いを解くと言っていたが約束は果たされなかった。風の噂では死んだらしい

おかげで私は今まで四度も中学時代を過ごしていた。そしてその同級生だった者達のほとんどが私の事を忘れていった

そして五度目の中学生活が明日にでも幕を開けようとしていた

それにしても今年度の新入生はなかなかくせ者揃いらしい。しかもよりにもよって私のクラスにばかり問題児が固まっている

あのじじい、絶対良からぬ事を考えているな……まあ私には関係ないが

どうせ何回も繰り返す中学生活の内の一回だ。少しくらい変わっていようがそうである事には変わりは無い

それこそ長年いろいろと噂の絶えない化物、Ｉでも来ない事には

ドンっ

「あっすみません……」

「……」

考え事をしてるとやけに背の高い女とぶつかった。とりあえず睨んでやる

すると女は私を見て首を捻り少し考えるような素振りをしてから口を開いた

「どこかでお会いしましたっけ？」

「人違いだ」

さっきも聞いたようなその問に私はさっきと同じくぶっきらぼうにそう返した

コンコン

「来てやったぞじじぃ」

私はわざわざノックした後にそう言い放ちじじぃの部屋のドアを蹴破る。ドアを開けようとしたタカミチが鼻を抑えていたが知った事じゃない

「おぉエヴァ、待っておったぞ」

「御託はいい。さっさと要件を話せじじぃ。わざわざ呼び出したんだ。つまらん事だったら承知せんぞ」

タカミチに構いもせずにそう言うじじぃ。相変わらずの気色悪い頭だ。もしつまらない事ならその気色悪い後頭部を矯正してやる。

「ふぉっ！？　そう焦るでないぞ、エヴァ。Ｉの事は知っておるか」
「ああその事か。どうやら最近日本で活動しているようだな。それがどうした」
私は嫌悪感を隠さずにじじぃの言った事に頷いた

Ｉ

それはかなり昔から存在する犯罪者の名前だ。主な異名は『千の顔を持つ悪魔』
その名の理由は目撃者の証言が全く一致しないからだ。複数犯説もあるが一致しない証言の数が多すぎる
そしてその手口は醜悪で残虐。死体の顔は全て判別不能までぐちゃぐちゃにするし見つかる死体は必ず体の一部が欠けている。品性の欠片もなく誇りも持ち合わせてはいないだろう。教会が嫌いらしい所だけは同意するが
ちなみに私は悪を自称してるがコイツは悪ですら無いと思っている
その名前を出したっていうことはおそらく言いたいのは警備の事だろう。まあ正直この学園にいる連中じゃ話にならないだろう。主に実力じゃなくて心が
「のぅ、エヴァ……お主に警備してもらえんかの？」

じじぃがそう言う。ついにボケたか？

「私は魔力を封印されてるんだ。血迷ったか？じじぃ」

「俺が封印を解いてやると言ってもか？」

私がそう言うとなにやら銀髪で赤目の男がしゃしゃり出て来た。とりあえずいきなり魅了を使ってくるとはなかなかの礼儀知らずらしい

「誰だ？　お前」

「俺は神崎　零。『紅き翼』の正義の味方だ」

苛立ちを表に出して聞くとバカは私にそう言った。確かに内蔵する魔力は凄いがコイツから戦闘者の放つ空気は感じられなかった。なんでこんな自信に満ちているのかわからない。呪いの話もきっとデタラメだろう

「紅き翼の英雄様ならIなんて楽勝だろうな」

「ああ、当たり前だ」

「ならばせいぜい頑張ってくれ。私は帰る」

舐めるような視線で私を見るバカを軽くあしらうと私はじじぃの部屋を後にした

じじぃもあんな中身がスカスカな奴を雇うなんてな。多少なりとも私はお前の事を評価してたのに残念だ

ベキ、バキ、ボキ

人通りの少ない麻帆良学園都市郊外の路地裏

地面に横たわった人間の体が音をたてながら変形していく。その顔には恍惚とした笑みを浮かべていた

がたいの良い男の体はだんだんと丸みを帯びた女性のそれへと形を変えていく

「中学なんて何年振りかな？　ワクワクしてくるよ。それに魔法使いもいるなんてファンタジーだねぇ。好きだよ、そういうの。興奮してきたなぁ。興奮してきた。あっ興奮しすぎて右手取っちゃった」

必死に対策を立てる魔法使い達を嘲笑うように少女の皮をかぶった化物は暗い路地裏で自分の右手を振り回しながら意味も無く爆笑していた

入学して（前書き）

さぁ中学生活スタートです。Ｉも転生者も全くよどみねーです

アキラファンは注意です

入学して

『英雄』とはなんだろうか？

よく『一人殺したら殺人犯、十人殺したら殺人鬼、百人殺したら英雄』など言われている

だったら飛行機事故を起こしたパイロットは『英雄』扱いになるだろうか？

私が思うに『英雄』とはその結果どこかに利益を生み出した場合に言うのではないだろうか

つまり『英雄』と言うのは極論、利益を生み出す存在でしかないのだ

いきなりだが俺、神崎　零は転生者だ

ある日いきなり神に会ってテンプレどうりネギま！の世界に転生した。そしてベターに紅き翼とともに暴れまわり戦争を集結させた

本当はエヴァの吸血鬼化の時から関わりたかったが神曰わく「もう時間経ってるから戻せない」らしかった。それくらいしろよ、神なら

紅き翼に参加して名声も得た俺は、原作メンバーが入学するタイミングで真帆良学園に赴任し無事一年Ａ組の担任になることに成功した

ここまではおおよそ予想通りだった

だがどうやら少し俺の知っている原作とズレがあるらしい。昨日エヴァに呪いを解いてやると言っても全然反応が芳しくなくなかったし。

それにＩとかいう奴の存在だってある

賞金首らしいが俺はそんな奴は知らないからおそらく俺以外の転生者だろう

ただ行動に全く一貫性がなく何がしたいのかわからない。大戦に参加する訳でもなく関西にいる訳でもない

ただ凄惨な被害者の情報だけが伝わってくる。イマイチよくわからない奴だ

まぁ来るというのなら相手になってやる。俺は負ける気はしねぇ

決意を新たに俺は教室の扉を開けた

「「「キャーカッコイいーー！！」」」

教室に入るやいなや黄色い声援が俺を迎える。神からもらった銀髪赤目のイケメンフェイスに不可能は無い

そう思い教室中を見ると顔が赤くなってるのがチラホラ。アイドル相手に騒ぐような反応がだいたい。無反応三人、溜め息一人

溜め息は昨日の事からかエヴァンジェリンだ。まあいずれ俺に封印を解いてくれと頼みこみに来るだろう

無反応なのの一人はザジ。これは予想通りだ。予想外だったのは……

「どうしたの？　長谷川さん。少し五月蝿いのは同意するけど」

「あっあぁ、なんでもねぇよ」

「アキラも……」

「ごめん、ボーっとしてた」

千雨とアキラの反応だった。それに千雨は原作とは違いメガネをしていなかった

もしかして転生者か？と思ったが魔力も気も感じなかった

まあ些細な事だ。気にする訳もない……なんたって俺は『英雄』だからな

教室の中は年頃の女の子でいっぱいだった。私が男だったら発狂していただろう。女ですら若干興奮を覚えるんだから

そんな女の子の元気に満ちた声が教室中に響きわたる。こんな中にバラバラ死体でも作りだしたらどうなるだろうか？大パニックだろうなぁ。楽しいだろうなぁ

「……ラ、アキラっ！！」

思考がいつものそれになりそうだった時にかけられた声に少し考える。あれ？アキラって誰の名前だろう

「ああ、ごめん亜子……っでなんの話だっけ」

「もう……水泳ができひんなったんは辛いやろうけどうちら今日から中学生なんやで。楽しい事も見つかるって。元気出して」

ああ……この『顔』の名前だ。そしてこの子は和泉　亜子。アキラの親友だったはずだ

『大河内　アキラ』は病気で未来を絶たれた悲劇のスイマーって事になっている。まあさすがに泳ぐとバレちゃうだろうからね

それにしても亜子は良い子だよね。今ここで私が彼女を傷つけたらどんな反応するだろう……気になるけどそれはもっと後のほうが楽しいだろう

「ありがとう、亜子」

私は亜子にそう微笑み返して大丈夫さをアピールする。亜子は心配そうな顔をしながら他の子と話に行った

「「「カッコイいーー！！」」」

亜子が離れて行った後、暇つぶしにリストカットをして遊んでいるといきなりそんな声が響いた

前を見ると銀髪赤目の明らかに日本人じゃない男が日本人だと言っていた。嘘つけ

みんなが興奮するなか遠くでは長谷川さんがボーっと銀髪赤目を見つめていた。あっごまかした

「アキラも……」

「ごめん、ボーっとしてた」

また亜子にそう注意された。リストカット痕は急いで消した

最後に舐めるような目で見られた。気持ち悪い

ホームルームが終わると亜子が佐々木さんと明石さんを連れてきた

「はじめまして、大河内さん。話は亜子から聞いてるよ」

「私達もスポーツやってるからその辛さはわかるつもりだよ」

「「だから友達になろう」」

なぜその結論に行き着くのかはわからないが二人共優しくそう声をかけてくれた。その二人には名前呼びを許してもらい私はある子のもとへと向かった。どうしてさっきあんな反応をしたのか気になったのだ

「長谷川さん」

「……えっと、大河内か。なんか用か」

私が声をかけると長谷川さんは若干面倒そうに応対した。

「長谷川さんは担任の先生の事はさ……どう思うの？」

「……普通にカッコイいんじゃないか。というかなんで私に聞くんだ？」

私が単刀直入に聞くと長谷川さんは無難にそう返した。わざとあわせているようだった

「いや、長谷川さんは何か知ってそうだったから。あの人、日本人なのかな？」

私がそう鎌を掛けてみると長谷川さんは言葉を詰まらせた後一言

「知らねーな」

とだけ言った

遣い、大河内　アキラ（前書き）

これは番外編です

今回『本物』のアキラが出てきますがちょっと卑屈です

ファンの方は閲覧注意です

時間軸は少し戻って小学校卒業式の日です

遺い、大河内　アキラ

頑張れ

この言葉は私の大好きな言葉だった。だって頑張ったらなんでもできたし褒めてもらえたから

頑張れ

この言葉は私の大嫌いな言葉になった。だって頑張ってもどうしようもない事がある事を知ったから

……大河内　アキラ

私、大河内　アキラは一生に一度の小学校の卒業式を病院の病院のベットの上で過ごす事となった

「はぁ……」

「そんな憂鬱そうな顔しないでアキラ。頑張って病気治そう。大丈夫、泳げるようにだってきっとなる」

「……うん」

お母さんの言葉にそんな生返事を返した。私の気分は上がらなかった

1ヶ月前、病気が見つかった当初はお母さんのかけてくれる言葉に元気になっていた

1ヶ月経ってお母さんの顔が厳しくなってくるのに気づいた。本人は隠しているみたいだったけど私にかける声が時々上擦っているのを聞いた

カレンダーがめくられるにつれてだんだんと幼い私にも分かってきた。この病気は治らないという事が……

病名は誰に聞いても教えてくれない。必ずはぐらかされる。……きっと相当マズい物なのだろう

「大河内さん。アキラちゃんの事でお話が」

「……わかりました」

お母さんが看護婦さんに呼ばれて病室を出た。最後にお母さんが覚悟を決めたような顔をした。なんか嫌な予感が頭の中を掠めた

「アキラーー！！」

「あっ亜子、卒業おめでとう」

そんなマイナス思考を断ち切るかのように亜子が元気よく卒業証書を広げて飛び込んできた。私は不安を悟らせないように亜子に笑顔を向ける祝いの言葉を贈る。
すると亜子はムスッとした顔をした

「そんな人事みたくいわんと。アキラもやって」

「うーん、実感わかないな」

「ほな、これでどうや」

亜子はそう言うとじゃじゃーんっと自分で効果音をつけて私に紙を渡した。卒業証書だった……私の、大河内　アキラの名前が入った卒業証書だった

「裏、裏見てみい」

「えっ裏？　」

予想外の感動に軽く固まっていると亜子が私にそうせかす。なんだろうと思い裏返すと無地の中に円になるようにメッセージが書いてあった

病気に負けるな
早く元気になってね
一緒に遊ぼう
泳ぎ教えて
友達だよ

頑張って

沢山のメッセージが書いてあった。正直こんなに友達いたっけと思いよく見るといくつかは亜子の字だった。その事実に少し笑った

「卒業、おめでとう。アキラ」

「うん……ありがとう、亜子」

「もう……笑うか泣くかどっちかにできひんの」

亜子は笑いながらそう言った。頑張って病気を治そうと思った

外ではカラスが鳴いていた

亜子が帰った後お母さんに卒業証書を見せに行こうとお母さんを探した。するとお母さんは先生の部屋で見つかった

「お母さ」

「大河内さん。アキラちゃんの……治療なんですが、投薬か肺の一部切除のどっちかになります」

夕日の差し込む診察室。お母さんと何故かお父さんが先生と向かいあっていた。私はとっさに扉の影に隠れた

頭の中では聞くなと警報が鳴りはじめた

「投薬ではホルモンバランスに影響が出る恐れがありますし必ず治るとも言いきれません。切除の方は……アキラちゃんから水泳の道を奪う事になります」

嘘だ

お母さんもお父さんも顔を見る事ができなかった。ただ背中は震えていた

「あなた……」

「アキラは……女の子だ。あの子が必死になって打ち込んでる水泳を奪うのは酷かもしれない。だけど投薬でボロボロになっていくアキラを見るのは」

やめて。私は別に女の子じゃなくたって良い。だから私から

「先生……切除手術の方……よろしくお願いします」

水泳（ユメ）を奪わないで

「わかりました。私達も全力を尽くし」

カタン

手から卒業証書が滑り落ちた。目から涙が零れ落ちた。私から大切な何かが抜け落ちた

わからなかった。わからなかった。だから走り出した

「アキラーー」

後ろからお母さんの叫び声が聞こえた。私は聞こえない振りをしてただただ走り続けた

カラスがうるさく鳴く夕暮れの街を走り続けた私はいつの間にか学校のプールにきていた

そこは病気になってから1日も早く帰ってきたいと思った場所だった。だけどプールサイドから眺める景色は以前とは全く違うものとして私に映った

今まで庭のように感じていたプールがとっても遠く感じた

全力疾走した私の体はすでに重くなっていた。以前ならこれくらいなんともなかったのにすごく苦しい

水面はそんな私の心や体なんて全く知らないように乱れなく規則的にさざ波がたっていた

何故か無性に腹がたった

「なんでっ！！なんでっ！！……げほっ、お母さんも……お父さんもっがほ、なんもわかってない」

プールに足を突っ込みひたすら足をばたつかせる。激情に任せてただひたすら。いくら咳がでようとお構いなしに

届かない事はわかっていた。ただなんかそうするしかなかった

「ねぇ……」

不意にかけられた声に足を止める。聞き覚えのある声に不思議と恐怖はしなかった

バシャン

隣から派手に水飛沫があがる

「……案外下手なんだね」

「ふふ。手厳しいなぁ」

私の言葉にその人影は苦笑いを浮かべながら私に振り返った。
その顔は私の顔をしていた。それを見て不思議と落ち着いた

「案外驚かないんだね」

「さっきもっと驚くことがあったからね」

「ふーん。泳がないの？」

「もう……泳げないの」

『私』は私にそう聞いてくる。そんな事知っているだろうに
そんな私の言葉に『私』は笑みを深くして言った。どちらかと言う
と気持ち悪い感じだった

「……辛い？」

『私』が私の方に手を伸ばしながらそう言う。私は答えない

「苦しい？　悲しい？」

苦しいに決まってる。悲しいに決まってる。まだ私は泳ぎたいと思ってる

「私がその苦痛……請け負ってあげようか？」

自問自答の最中、ぽんと放り投げられたその言葉。私にはそれがとても甘い誘惑に聞こえた

「『苦しみ』も『悲しみ』も『期待』も、『夢』も『顔』も……全て請け負ってあげようか？」

『私』の声がじんわりと私の中に染み込んでいく。苦しみからの解放という誘惑が私の中の何かを侵していく

「うん……お願い。『アキラ』」

「わかったよ。アキラ」

夕日に光った雫を纏う『私』の姿に引き込まれるように私は水の中

に落ちた

次の瞬間、私は大好きな水の中で意識を失った。

夕日の影になって『アキラ』の顔を見る事はできなかった

もちろんアキラの顔を見る事もできなかった。多分笑っている筈だ

ごめんね。亜子……

「……アキラー、どないしたん？　そないな気持ち悪い笑いして」

「なんでもないよ……亜子」

数日後、何事もなかったように手術をうけ大河内　アキラは麻帆良学園女子中等部へと入学をした

カラスはもういなかった

新しい先生が来て（前書き）

更新遅れて申し訳ありません……まあこれが作者の本当の執筆速度なんですが

その割に内容は薄いです

今回は少しキンクリしてネギ先生登場です

新しい先生が来て

『先生』とは尊敬できる存在に使われる言葉だろう。だから医者や政治家など自分に利益を与えてくれる存在にも使われるのだと思う

『教師』とは勉学を教える存在の事だろう。勉学とはあまり言いたくはないが試験に勝つ為の方法だと思う

学校の『教師』は勉学以外に様々な事を教えてくれる

だから私達は『先生』と呼び彼らを慕うんだろう

赤髪の男が私の前にいた。男は英雄と言われていた男だった

私は歓喜した。その男ならば私の記憶のもやがかかっている部分の事がわかるかもしれないと

私が何者かも……わかるかもしれないと……

そう思って私は

「いただきます」

その男を喰おうとした

次の瞬間身の危機を悟った男は魔法を唱え当たった私の右手が吹っ飛んだ。すぐさま左手を伸ばし男がそれに反応して魔法を放つ。左手が宙に舞う頃には復活した右手が相手を掴んだ

男は左足で私の下腹部を蹴り放つ

私の腹部に穴を開けながらもなお男に近づき喉笛を噛み千切ろうと口を突き出した

ガブリ

「んあ……」

次の瞬間私の目の前には破れた枕があり、口いっぱいに味気ない綿毛が広がっていた

朝からイマイチ夢見が良くなかった。なんか悪い事でもあるんだろうか？

それにあれは誰の頃の記憶だろう？　Ｉの記憶である事に変わりはないが姿を変え名前を変え長い事生かされているので記憶がものすごく曖昧になってる

具体的に言うと一つ前の姿の時の事はまだ鮮明に覚えているがほかはかなり断片的である

「とりあえず悪い予感なら占い研究部に占ってもらおう」

「何やアキラ？　悩み事あるん？　」

「おはよう近衛さん。神楽坂さんも」

私がそう言うと桜咲さんがすごい形相で睨んできた。私はその視線から逃げるように振り返ると朗らかな笑みを浮かべる近衛さんと何故かジャージの神楽坂さんがいた

「神楽坂さん、なんでジャージなんか着てるの？」

「なんか今日からうちの担任やるっていうガキに服剥ぎ取られたのよ……くしゃみで。零先生が来てぶん殴ってたけど」

私が聞くと神楽坂さんはウンザリしたようにそういった。くしゃみで服を剥ぎ取るってどうやるんだろうか？　もしかしたら魔法なんだろうか

「というか零先生はどうするの？　副担？」

「みたいやね。どうやら高畑先生が副担から外れるみたいやから」

「ふーん」

私はそっけなくかえした。正直どうでもいい。私が心から先生と呼ぶのは新田先生くらいだし

私の反応に高畑先生が好きな神楽坂さんが食い下がろうとするがチャイムがなったのでそこでストップとなった

どうやら新しい先生が来るのは周知の事実のようだ。すでに鳴滝姉妹によって歓迎用のトラップも用意されていた

思うんだけど黒板消しだけにするべきじゃないだろうか？　それならジョークになるけどこれはなかなか……

ガラガラ

扉が開いた。黒板消しがまっすぐ入ってきた先生の頭の上に落ちる。

ポフ

先生の頭の上で白い粉が立ち上る。その様子にマクダウェルさんと零先生は驚いた顔をする。どうしてだろう？

ガタガタと次々とトラップにかかって行く新しい担任を見ながらそう思った

……どうでもいいがこうなる事が分かっていただろうに何も言わない零先生はなかなかに薄情だと思った

煙が晴れるとそこにいたのは幼い子供だった……十歳くらいの

一応もう一回言っておこう。世間一般では小学生ぐらいだろう子供だった

三回はさすがにあざといだろうから言わないがそれくらいの衝撃だった

だって仮にも私達は生徒である。学ぶ権利及び義務があるはずだ

私達はこの少年から何を学べというのだろうか

私の疑問はクラスメートの大声に吹っ飛ばされた

どうやら今日バカの変わりに新しい担任が来るらしい。しかもそいつはあろうことか十歳のナギの息子だそうだ

正直最近じじいの手腕にすごい疑問がある。麻帆良の中でＩの被害が出ていないからと言って相変わらず大丈夫だと思っているのか英雄の子供を連れてくるなんてな……

だいたい麻帆良で出てなくても半年前に顔の無い死体が群馬の山の中で見つかったばかりだろう

「案外すでに侵入されてたりしてな」

「どうかなさいましたか？　マスター」

「いや、なんでもないさ。ところで長谷川と大河内の身辺調査は出たか？　」

私は長谷川と大河内を一瞥した後自分の従者である絡繰　茶々丸にそう聞いた

あの二人は実際に怪しい。バカが来た時の反応といいどこかがおかしいのだ

ロボ……ガイノイドである茶々丸は無表情に答えた

「大河内さんに関しては特に不自然な点は見つかりませんでした。入院当時のカルテも確認できました」

「そうか。長谷川は」

「長谷川さんも特に不自然な点は見つかりませんでした。ただ小学校の時に一時期『疫病神』と言われてイジメにあっていたようです」

「……そうか。わかった」

茶々丸の答えにそうかえしたタイミングでナギのガキが扉を開けた

ガキは魔力をだだ流しにして魔法障壁を張っていた

秘匿の意識があるのか小一時間問い詰めたかった

黒板消しがガキの頭上へと落ちる。それは魔法障壁をすり抜けてガキの頭で白い煙をあげた

……今何が起きた？ガキの後ろを見ればバカが口を開けて固まっていた。ということはアイツの仕業ではない

長谷川と大河内を見ると二人は相変わらず薄い反応をしていた

……面白い

私に理解ができない現象が目の前で起きたのだ。こんな思いは久しぶりだ

「茶々丸」

「はい」

「今日は夕飯は要らない。変わりに放課後あの坊主を監視していろ」

さて……本当はサボる予定だったが今夜の歓迎会、出てやることにしようか

さぐりあって（前書き）

投稿間隔が開いて申し訳ありません

相変わらずの短さ……どうやったら長くなるんだろうか？

さぐりあって

『魔法』とはなんだろうか？

ファンタジーかもしれないし奇跡かもしれない。ただの技術かもしれない。まあなんにせよ多分思い描くものはプラスイメージだろう

ただこの『魔』という字はどうだろう？

悪魔を筆頭に多分マイナスイメージを思い描くと思う

じゃあ『魔』『法』はプラスイメージ？

歓迎会の始まる前に薬味によるアスナへの魔法バレイベントが有る

はずだ。そう思い俺が階段の前で待っているとキーマンであるのどかだけじゃなく茶々丸まで一緒に本を抱えて降りて来た

この場面では茶々丸は存在しない筈だ。いったいどういう事なんだ

「宮崎さん。そんなに無理をなさってはいけませんよ」

「す、すいません茶々丸さん……わざわざ持っていただいて」

のどかの代わりにほとんどの本を茶々丸が持っている。これじゃ魔法バレイベントはおこりそうにないな。そう思って背を向けた……

その時だった

「きゃっ」

短い悲鳴が聞こえたかと思うとのどかの体が中を舞っていた。それに気づいて振り向いた時には薬味坊主がのどかを魔法で助けるという原作どうりのシーンになっていた

「大丈夫ですか？宮崎さん」

目の前に本が積まれていて見えないのか茶々丸がそう言う。薬味坊主は自分がヤバい事をしたことに気づいたのかそそくさと立ち去った。そしてそれをアスナが追いかけるという結果的に原作どうりの

形になった

それにしてもなんで茶々丸がここにいたんだ？　もしかして他に転生者でもいるのか

まあいるんだったら今回はソイツの思惑は外れだな。薬味坊主は結局魔法バレしちまったし

でもこれでハッキリした。この世界に修正力が存在してる

特に薬味坊主に関しては特に顕著に働いているんだろう

そんな事は俺にとっては些細な問題だ。問題は他にいる転生者の存在だ。茶々丸の事があるからおそらく相手はエヴァ一味と友好な関係にあるんだろう……うらやまし、けしからん

だから前エヴァは俺の申し出を断ったのか。そうに違いない

待ってろよ転生者、時が来たらお前は俺がぶち殺してやらぁ

歓迎会の時間になった。なにやら長谷川はバックレようとしていたがそれは私が阻止した。その時かなり不機嫌な顔をされたがそんな事は関係ない

大河内はいつもどうり運動部の連中につれられて参加していた

長谷川はやる気なさそうに大河内と二人でガキから一歩引いたとこ

ろで菓子をつまんでいる

「マスター」

「坊主はどうだ？　茶々丸」

「特に不可思議な点はございませんでした。ただ魔法を行使し階段から落ちた宮崎さんを助けた為神楽坂さんに魔法使いである事が露呈した模様です」

あまりの迂闊さに軽くため息がでる。まあすでに手はうっているだろう。学園としても英雄の子供にスキャンダルはつけさせたくない筈だ

……いや、もしかしたらこのクラス自体がスキャンダルを前提で組まれているのかもな

「それと先程のネギ先生の魔法行使のさい付近に零先生がいらっしゃったようです」

自称英雄も傍観か……どうやら私の予想は後者があたりらしい

今までクラスの過剰戦力については私と超の危険性に対した物だと思っていたがどうやら少し認識を改める必要があるらしい

どうやらじじぃは私をそうとう甘くみているようだ

持っていた紙コップを握り潰す

……気に食わん

あんな自分より格下な存在に舐められているという事実が私をいらだたせた

まあそんな事は今は忘れよう。じじぃは後でたっぷりと見通しの甘さを味わうだろう……それよりも今は

「良い夜だなぁ、長谷川、大河内」

コイツらに私は興味がある

当の二人はいきなり声をかけられた事に驚いていた

「マクダウェルさん？　どうしたの、いきなり」

「いや、こんなに騒がしい所には殺人鬼でも混ざっているのではないかと思ってな」

「随分と物騒な話だな」

私の振った話題に二人とも訝しげな顔をする。少なくとも私だって宴の席でする話ではない事くらい理解している

「もしかしてマクダウェルさんってそういうゴシップ好きなの？」

「あ、ああ。そうだな」

大河内がそう聞いてくる。何故かどもってしまったが大丈夫だろう。
そんな大河内の言葉に長谷川は嫌そうに顔をしかめる

「オイ、大河内……私はそっち方面の話は嫌いだ」

「そうだね。長谷川は嫌いだもんね。怖い話」

「バーロ、私が嫌いなのは非常識だ」

長谷川がため息をつきながらそんな事を言う。そんな長谷川をほっといて大河内は気づいたように私に話を振ってきた

「マクダウェルさんはどう思う？　」

「なんだ？　学園長がぬらりひょんだとか言うのか？　」

「違うよ……マクダウェルさんは知ってる？　この学園って吸血鬼がいるらしいんだ」

大河内の口から出た言葉に私は内心驚きつつ笑った

「はは、吸血鬼か。それは殺人鬼とどっちが強いだろうな」

「両方ともただのバケモノだよ。人に退治されるだけの存在」

「違いない」

私は笑い、大河内は笑わなかった

結んで（前書き）

意味のあまりない話です

結んで

人の噂も七拾五日
七拾五日なんて2カ月と半分でなくなるらしい。新聞やテレビのニュースなんてもっと早く忘れさられるだろう
だけれどその噂が及ぼす影響は決して七拾五日でけりがつくような事ではないだろう
長年積み重ねた物が崩れさる時なんて一瞬だ

今さらだが私は麻帆良に吸血鬼がいる事が単なるゴシップネタではない事は知っていた
私がそれを知っているのは前世からみていたなんて電波な理由ではなくて、盗み聴きしただけというとても現実的な理由だ
私が大河内　アキラになってから数日、不用心に隠蔽魔法もかけずにいかがわしい事を喋っていた魔法使いの言葉に闇の福音という単

語があり、それを聞いただけだ

因みに隠蔽魔法をかけられてしまうと私にはチグハグな会話にしか聞こえないのだけれど

闇の福音……魔法使い達の間で私と同じように恐れられ、私と同じように悠久の時を生きる、私と同じ異形のバケモノ

今までそれが誰だかはわからなかった。けれどこの前話してみて感じた。悟った。受け止めた

相手が私に声をかけた時、体中が震えるような錯覚に陥った。それはおそらく相手も同じだろう

今まで鳴滝達と変わらないただの幼女だと思っていた。だけどそんな認識は一瞬で吹き飛んだ

赤毛の英雄と同じく彼女を調べれば私がなんだかわかるかもしれないだけれどそんな事よりも私の心は違う方向に動いていた

……コイツを屈服させたい

コイツの持っている自信破壊をして、コイツの過去を粉砕して、コイツの心を蹂躙して、コイツの肢体を陵辱して、コイツの血に酔いしれたい

「アキラ、アキラ」

聞こえた声に驚き、急いで黒い奔流が私の中から溢れ出そうになるのを抑えつけて大河内　アキラを装う

「どうしたの、亜子」

「どうしたのやないで。アキラは休んでてって言ってるやん。なんでコートの中におるん」

軽く怒ったように頬をふくらませてそう言う亜子の言葉に周りを見渡す。ああ……そういえばウルスラの方々とドッジボールで戦うんだっけ

「大河内さんは休んでらしてかまいませんわ。私達に任せてください」

オホホと笑いながら言ういいんちょ。優しいよね……本当にいいんちょから視線を逸らすと無視を決め込んでいる吸血鬼と桜咲さん、龍宮さんらが見えた

見事に関係者ばかりだなぁ……私も一応一般人扱いのはずだけど緩和材として他にも一般人に入って欲しい……あ、そっか

「いいんちょ、人数は揃えた方がいいよ。多くて有利な事なんてないから」

「どうしてですの？　向こうがくださったハンデですのに」

「だって普通ドッジボールって外野数えない？　」

詳しいルールは知らないがだいたい遊ぶ時はそうだ。……まあ一人でアソコ逝きたくないだけだ

「そっそうですわね……私としたことが」

「そういう訳だから長谷川は私と休憩でいい？　」

「ええ、わかりましたわ」

どうやらいいんちょは私のアドバイスを理解したのか、恥ずかしそうにそう言った

私はいいんちょに微笑んだ後長谷川を連れてコート内を後にした

半ば拉致する形で連れ出した長谷川は釈然としないような顔で私をみていた

「……助かったけどなんで私を連れ出したんだ」

「逆に聴くけど長谷川は一人であの殺伐とした空間に行きたい？　」

私の言葉に長谷川は吸血鬼達の方を見る。明らかに嫌そうな顔をして首を横に振った

「でも大河内ならお気に入りのゴシップトークができるんじゃないのか」

……長谷川、今私が一人であそこ行ったらゴシップトークどころゃなくなっちゃうよ

そう思うが口には出さない。コートの方が騒がしくなってきたので目を向けるとなにやら零先生が介入しているようだった

「ドラキュラは見つかったか？　聖職者」

「ならジャック・ザ・リッパーは見つかった？　名探偵」

上機嫌でかけられたその声に反射的に殴りかかりそうになるのを押さえそう笑い返す。多分今の弱まってる彼女なら問題なく殴れるだ

ろう

だがそれは厄介を招くし何より面白くない

「当たり前だろう、私を誰だと思っているんだ、ワトソン君」

「ホームズ、君は私に喧嘩を売っているのかい」

「冗談だ。ただ生憎私は疲れていてな、晩餐会は暗闇の中でいいか？」

「仕方ないかな。私だって君の本気が見れるんだ……今から楽しみだよ、ホームズ」

そう言いながらお互いに笑いあう。もちろんいいんちょに向けた笑みとは全く持つ意味が違う

「お前らは何をやっているんだ？」

そんな私達のやりとりに痺れを切らした長谷川が呆れた口調でそう言う

……暇を持て余したバケモノの遊び、もとい冗談混じりの不戦条約

吸血鬼が封印されているから封印の解ける大停電の日に互いに蹂躙しあう、だからそれまで停戦。首洗って待ってろ……という意味の

とはいえないから適当にお茶を濁す

「マクダウェルさんもホームズとか読むんだ」

「これくらい一般教養だ」

お互いそう言って再び笑いあう。長谷川はため息をついていた

そんな私達を零先生が訝しげにみて、そして何か呟いた

さぁ『転生者』ってなんの事だろう？

最後に「見た目は幼女、頭脳は老婆、名探偵エヴァ」って言ったら殴られた

曖、長谷川　千雨（前書き）

今回は千雨ちゃんの物語です。改変がありますがあしからず

時間軸は過去～入学式です

果たしてこれは魔改造って言うのだろうか？

曖、長谷川　千雨

魔法があるフィクションは好きだ。可愛いし夢がある

普通のリアルは好きじゃない。私の言葉は否定されるから

魔法のあるリアル？勘弁してくれ

……長谷川　千雨

私は魔帆良という土地が嫌いだ。この土地は私の持っている認識とズレている

例えば意味の分からないほどでかい図書館があったり

例えば某自動車会社のロボットを遥かに凌ぐ出来のロボットがあったり

例えば教師が生徒を１０メートル位吹き飛ばしていたり

極めつけはギネスなんて目じゃないほどでかい木があったりする

その異常に気づいていたのは私だけだった。友達も先生も親もみんな私が異常について話すと私の事を疎ましがった。挙げ句の果てに一度カウンセリングを受けさせられそうになった。実の親にだ

その時に私は悟った。私は誰にも信用されて無いと

この世界に私の味方はいないのだと

そんな私にも転機が訪れた。あの時の出来事は未だに信じられないが……

私は夢の中で神に出逢った、いや……出遭ってしまったが正しいかもしれない

そいつの姿は思い出せないが言っていた事は思い出せる

『……認めてもらいたいかい？』

『私の言う事、信じてくれるの？』

『信じるよ、千雨ちゃん』

その言葉を聞いた幼い私は涙を流しながらそいつに抱きついた。そいつはにこりと笑いながら私を見ていた

『君は今、夢を見ているんだ。起きたらわかるはずだよ。みんなの見ている世界は君の見ている世界に近づいているはずだから……きっとね』

最後にそう言ったそいつの言葉は本当だった。……ある意味本当過ぎた

その日を境に私の見る世界は少し変わっていた

私の耳にはいつもどうり非常識な噂が耳に入ってきた

例えば広域指導の先生が生徒を１０メートル飛ばしたとか

例えば車より早く走る人がいるとか

ただ私の目には一切の非常識が映らなくなった

車より早く走る人は私が見ていると常識的な速度で走っていた

バカでかい世界樹とか言う木は私の目にはせいぜい屋久杉ぐらいに映った

私の常識に合わせた世界が広がっていた

でもそれだけだった。所詮これは私が今まで見ていた異常が見えなくなっただけで異常は存在している。ただの幻か幻覚の類の何かだと思っていた

だけど私の認識は間違っていた

ある日広域指導の先生が生徒を殴り飛ばした。いつもなら魔帆良パワーでギャグで済むレベルの事だった

だけど私が見ていた事によって飛ばされた生徒は2メートルぐらい吹き飛んだ後その場にうずくまっていた

後で気づいた事だがもともと吹き飛ぶ事によってダメージは軽減されているのだ。私が見ていたから全然飛ばなかったがその分のエネルギーがその生徒の体に襲いかかった事になる

つまり私が見ている世界は私以外にも影響を与えているという事だった

嬉しかった。この時初めて私とみんなが同じ認識を持っているように感じたから

……だけど違った。私と同じ光景を見てもみんなと私の認識はズレていて……

その後も私がいると魔帆良パワーで都合よく片付いていた物がいかなくなっていきしまいには私は

『疫病神』

そう呼ばれていた

幸運を呼ぶ椎名、不幸を呼ぶ長谷川と除け者にされた私は人との関わりを極力断ち切り外の世界に逃げ場を求めていた

中学に入学して学区も変わった事により私の事を知っている奴は減ったがそれでも私は他者との間に壁を作っていた

そんな私に声をかけてきたよっきょうな奴がいた

「長谷川さん」

「……えっと大河内か。なんか用か」

「長谷川さんは担任の先生の事はさ……どう思うの？　」

大河内の言葉にどう返そうか一瞬悩んだが、どうせみんなと違う反応を見せた事が気になっているだけだろう。適当に受け流すか。そう思って口を開いた

「……普通にカッコいいんじゃないか。というかなんで私に聞くんだ？　」

「いや、長谷川さんは何か知ってそうだったから。あの人、日本人なのかな」

何を言っているのかわからなかった。多分私と大河内の間で認識のズレがあるのだろう

だが他の生徒がそんな話をしていない時点でこいつの認識も多分他

の奴らとズレているんだろう

ただ私が何かを言える訳ではない

「知らねーな」

私はそっけなく大河内にそう返した

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9379t/

Ｉは哀より出でて哀より愛し

2011年10月6日16時53分発行